伝記文学と英国人

村　松　加代子

立派な生涯について書くことは、恐らく、立派な生涯を送ることと同じくらい難しい[1]。

——リトン・ストレイチィ

人間というものは、意味のあるゴシップ、つまり、小さな逸話だが、その人の心の奥のいちばん急所、その人の性格、そういうものを端的に表わす逸話というものに、昔から興味、好奇心を抱いてきた。また、そうした人間性に対する人間の興味、好奇心、ゴシップ好きは、いくらそれを消し去ろう、潰そうとしても潰れっこないから、当然それが大部の伝記書となり、伝記のブームが出てくることになる、という趣旨のことを中野好夫氏が書いている[2]。

また、英国の外交官で作家・批評家のハロルド・ニコルソン卿（Sir Harold Nicolson 1886-1968）は、伝記文学の源を探って、次のようなことを記している——人間には、原始の昔から、死者に対して彼を永遠不滅のものにしたいという願いがあって、例えば、同じ種族や家族のリーダーがこの世を去ると、それと共に故人の備えていた魔力（“magic”）が自分たちから抜け出ていくと信じて、それを様々なモニュメントの形でつなぎ止めようとした。例えば、ケルン、一本柱の碑（“monolith”）、ピラミッド、戦没者記念碑（“cenotaph”）、叙事詩、「サガ」（“saga”）、「勝利の歌」（“paean”）、などがそれであり、また、哀悼の念やみ難く、それが「哀歌」（“lament”）や「未亡人の伝記」（“widow-biography”）の形をとることもある。換言すれば、すべての伝記の根源には、故人を記念したいという止むに止まれぬ衝動が働いている[3]。

とすると、人間の居るところ、伝記あり、というわけであろうが、中野好夫氏は、先の文章に続けて、「日本はけしてそんな伝記のさかんな国ではなかった」とも記し、昭和30年に出た岩波新書版『昭和史』と、同書を人間不在の歴史で実に下らんと断罪した亀井勝一郎氏との間に交わ

された所謂「昭和史論争」を引き合いに出しているのは、彼がそこに国民性との関連を見ている事は明らかである。彼はまた、優れた伝記文学を生んだ国民として、最も古いところで中国人、次いで、古代ローマ人、そして、ルネサンス期に入ってイタリア人を挙げ、近世にはいってからは英国人がそれを一大発展させた、と概観している[4]。

確かに、ルネサンス以前はともかくとして、「英国は伝記文学というジャンルに関する限り、質量ともに、群を抜いた筆頭国」[5] であることは間違いなく、かの地における伝記出版産業は、経済不況に喘ぐ今もなお、衰えを知らぬ勢いと見受けられる。当の英国人、テリー・イーグルトン（Terry Eagleton）みずから、「個人の伝記に寄せる英国人特有のあの偏愛ぶりには、際限と言うものがないと思われる」[6] と記しているくらいである。

筆者自身の英国暮らしの体験、折々の英国滞在、長きにわたる英国人たちとの交友関係から推してみても、先のイーグルトンの言葉には無条件に同意したくなる。かの国の書店を訪れる度に、日本のそれとの違いを痛感するのは、延々と続く「フィクション」の棚に隣接して、「伝記」の棚が、これまた、かなりのスペースを占めている事である。あちらの新聞、雑誌の「書評欄」、「新刊予告欄」についても、同じ事が言える——というよりも、次々と刊行される玉石混交の伝記の新刊書がこうした記事の中で、いち早く取り上げられ、それに著者自らが作品や執筆にまつわる裏話を披露したり、書評家がきちんとした解説、評価を付したりしているものだから、ただでさえ、伝記好きの英国人のこと、読者も覚えずして興味、関心を掻きたてられ、それがあの書店の「伝記」コーナーの賑わいと化すのであろう。

また、長い歴史を誇り、階級制度が今日でも目に見える形や見えない形で存在するかの国の人々は、自分たちのルーツ探しに並々ならぬ熱意を見せ、そうした人々に代わって、彼らの家系図を探し当て、保証することが一つの立派な商売として繁盛している。トマス・ハーディ（Thomas Hardy 1840-1928））の『ダーバヴィル家のテス』（*Tess of the D'Ubervilles*, 1891）のヒロイン、純潔で誇り高きテスの悲劇も、もとはと言えば、貧しい彼女の父親が、自分たちの家系が由緒あるものだという事を、たまたま通りかかった牧師から聞かされた時に始まったのであり、家系に寄せる英国人の執着をよく表した作品と言える。

さて、次に、あるドイツ人の目に映った英国の姿についてご紹介しよう――ドイツ、コンスタンツ大学の英語・比較文学の教授、ユルゲン・シュレーガー（Jürgen Shlaeger）は、「これは、チュートン人の過剰反応かも知れませんが、」と断りながら、「伝記の権勢に伴う、パーソナリティへの熱狂ぶり（“cult of personality”）と英雄好み（“fondness for heroes”）は、英国人に特有のものと映る」[6]、また、英国という国の「毛穴という毛穴から、伝記がジトジトと漏れ出てくる」、と感慨をもらしている。そして、伝記文学が18世紀以降、英国で高い文化的ステイタスを得てきたのに対し、ドイツでは取るに足らぬものとみなされてきた理由として、ポスト・モダニズム、特にデストラクションの思想が両国に与えた衝撃の度合いの落差と、勤勉、信条への献身、哲学的伝統、体系的思考を重んじてきたドイツの伝統に言及しながら、英国の経験主義、国民的アイデンティティ、歴史的連続性、文化的中央主義と、ドイツの理想主義、国民的アイデンティティの欠如、歴史的不連続性、文化的地方主義とを対比させ、ドイツ（とくに、ナチスへの幻滅を味わってからのドイツ）には、祖先崇拝、英雄崇拝という国民的メンタリティが欠落している事実を挙げているが[7]、簡潔にして要を得た分析であると思う。

シュレーガーはまた、英国の「国立肖像画美術館」を訪ねた際にも、この種の美術館にかなりの違和感を覚えたらしく、次のように記している――「英国的感受性を持ち合わせない人間にとって、国立肖像画美術館を訪ねることは、トラウマに等しい。このような建物があること自体、パーソナリティを中核に据えた文化（“a personality-centred culture”）の大いなる標識である」[8]。　さらに、彼は、こうした文化圏で日々を送る彼らの暮らしにも思いをはせて、絵画、肖像画、伝記の表紙、教員控え室、宴会場、壮麗な邸宅、図書館、書店、記念碑、教会等、あらゆる所から、著名人の顔がこちらを向いていて、「私を見て下さい。私のやってきたことを見て下さいよ！　ところで、あなたはこれまで何をやってきたのです？」、と問いかけているようで、知的野心家にとっては、こうした国民的名士の方陣に対して自己定義をするという文化的プレッシャーには相当きついものがあるだろう」[9]、とも記している。

確かに、シュレーガーの言うように、美術に詳しい英国人の友人に尋ねたところ、国立美術館は世界に数多しと言えども、肖像画だけを収集・展示している国立美術館（個人美術館の場合はまた話が違う）は世界に

ただ5館あるだけで、1つはワシントンに、1つはフィレンツェに、そして、残る3館は英国ならびにアイルランド（ロンドン、エジンバラ、ダブリン）にあるそうである。フィレンツェのそれは、専ら、アーティストを描いた肖像画に限定しているのにたいして、英国・アイルランドのそれは3館とも、あらゆる領域で活躍している著名人の肖像画を対象にしており、それらを領域別に展示していて、私なども、絵画の善し悪しの興味に加えて、例えば、文学ゆかりの人達のコーナーから政治家たちのコーナーへ、次には王室の人々のコーナーから軍人たちのコーナーへという具合に気ままに見て回っては、職業によってずいぶん人の相貌が違うものなのだな、などと勝手な楽しみ方をしている。(ワシントンのそれについては、まだ調べを尽くしていない)

ちなみに、筆者には、「国立肖像画美術館」と同じくらい、「マダム・タッソー・蠟人形館」の存在にも、個人のパーソナリティに寄せる英国人の国民的愛好心を実感したことであった。

「伝記」と「肖像画」に寄せる英国人の愛好癖については、わが日本の文豪・夏目漱石によっても、一世紀も前に観察・分析されている。言うまでもない事だが、漱石は、松山中学（熊本第五高等学校）に英語教師として奉職していた頃、文部省派遣の第1回留学生として、1900年9月から1903年1月までロンドンに滞在した。いくら英語の教師だったとはいえ、英国まで航路で約40日かかった時代の話、上陸するや、御殿場から日本橋にいきなり出てきた兎よろしく、風俗、心情、習慣、国民性など、全く異質の文化の真っ直中に放り出された。最初のうちこそ、この機を逸するのは惜しいとばかりに、最大限の収穫をあげんとて、人並みに名所巡りに精を出したが、やがて自閉し始め、神経衰弱にかかり、見兼ねた日本人の友人が、「ナツメキョウセリ」との電報を文部省宛てに打ったくらいだから、同じ西洋人として、しかも、現代に生きる西洋人として「国立肖像画美術館」を訪れたくだんのドイツ人のトラウマの比ではなかったであろう。だが、漱石は、留学期間も半ばという頃、「自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなり」、「彼等は何者ぞやと気概が出た」、と後年記していて、彼がついに独自の文学的立脚地を得たことが窺われる。

英国人の国民性の神髄ともいうべき「自己本位」、「国家主義」に対す

る「個人主義」への漱石の開眼には、無論、英国人との日常的な付き合い、英国の様々な社会現象や文化遺産との接触に加えて、専門の英文学の鑑賞(自閉してからは、殆どこれに時間を当てることになる)が大きくかかわっていたと思われるが、英国絵画、特に、肖像画の鑑賞にあずかるところも大いにあったのではないだろうか――

「余のごとき浅薄なる絵画の知識では・・・」、とか、「甚だ浅薄な思付とは気が付いているが・・・」などと謙遜しながらも、こちらの方面でも、彼一流の旺盛な想像力と明晰な分析力を以て一枚の絵の前に立ち、その絵から受ける印象を諸々の社会現象と関連づけて、広く目配りされた絵画論を展開しているからである。

ところで、筆者が本稿で、自称、他称を問わず、英国学（？）の権威として名を馳せている当代の日本の学者や評論家をさしおいて、一世紀も昔の英国しか知らない漱石に何故こだわるのか。彼の偉大な英文学者としての側面――それは言うまでもない。また、幼い頃から彼の愛読者だったから、と一応尤もらしくもお答えできるが、このコンテクストに限って言えば、彼が自閉し、危うく狂人として日本に強制送還されるほどに煩悶した――そのことにいたく感激し、高く評価したい気持ちを禁じ得なかったことも大きい。ここに漱石とほぼ入れ違いに、やはり、文部省の派遣留学生としてアメリカに渡った作家がいる。永井荷風がその人で、彼は、最初の１年弱をタコマで過ごした後、カラマズー・カレッジの学生として、趣を全く異にするミシガン中西部に移り住んだ。もともとフランスに憧れ、アメリカでも南の生活を送りたいがために、ルイジアナの学生になりたかったくらいだから、カラマズーの鄙びた過酷な環境に順応するのは相当こたえたらしいが、ついには大自然の魅力に目覚めていく様が、彼の『あめりか物語』からみて取れる。「外国文学に触れ、「異郷」に生きて、まず異質的な抵抗から出発しなかった人間の意見は信用しない方がよいと言うのが・・・僕の持論だ」(10)、と佐伯彰一氏は書いているが、私も同感の至りである。対象が身近かになればなるほど、真実が見えにくくなる、というパラドックスがここにある。それゆえ、筆者には、やはり、漱石なのである。

18世紀に、肖像画が繁栄を極めた要因として、漱石は、ジョシュア・

レノルズ（Sir Jhosua Reynolds 1723-92）のような肖像画の大家が現れたことと、物質的膨脹という大原因が伏在したことを挙げ、さらに、それを「性格描写」に強調を置くようになった文学的動向とも関連づけて、「異なった社会的現象の底にも暗流が１つになって彼我を貫いている」、「肖像画は現前の人をそのままにあらわすのが主であって、モデルそのものがある目的の方便に使用されるのとは大変趣きが違う・・・描かるべき人物が、偽らざる自己の表情すなわち性格の符徴を持ってくるのを、画家のほうでは随時に模写するのであるから、いわゆるカラクター・スケッチとたいへんその揆を一にしたところがある・・・もし一代の好尚が根にあって、その根から分かれて画に入って肖像画となり、文にあらわれて一種の性格描写となったとすると、だいぶ話がおもしろくなってくる」[11]、と記している。

漱石の言う「カラクター・スケッチ」、すなわち、性格描写に寄せる英国人の並々ならぬ関心が、一方で、肖像画を生み、また一方で、ある種の文学を生んだのだとすれば、ある実在の人物の性格、その性格の上に築かれる生涯をまるごと再現しようとする伝記文学が英国人の興味を喚起するのは当然の理と言える。それならば、いっそ、本人自身が語る「自伝」の方により興味を覚えそうなものだ、という考えも当然出てくるとは思うが、両者は質的に相異なるものであり、これ自体大きなテーマであるので、この問題については、稿を改めて詳述することにしたい。

ところで、英国の伝記文学の最大傑作としては、ジェイムズ・ボズウェル（James Boswell 1740-95）が書いた『サミュエル・ジョンソン伝』（*The Life of Samuel Johnson*, 1791）を、そして、伝記的事業の最大の功績としては、18世紀の思想史家・文芸評論家のレズリィ・スティーヴン卿（Sir Leslie Stephen 1832-1904）が発案し、初代編集長として遂行した『国民伝記辞典』（*The Dictionary of National Biography*, ed. 1882-91）を挙げることに、異論のある人はまずいないと思う。前者は、今日なお、極めつけの伝記文学として、他の追随を許さず、後者は、その規模（全29巻、現在も刊行が続行中）、その批評的洞察力と内容の正確さ、その文体の質から言っても、これに比肩するものがなく、まさに伝記というジャンルを集約する大事業と言わねばならない。

この辞典が他の国民伝記辞典と著しく異なる点は、執筆者に個人主義

を奨励していることであろう。書き出しのフォーマットこそ伝記的事実を共通項としているものの、それに続く記述は内容的にも長さの点でもまちまちである。これは、すべての記述が、著名な人物の死後まもなくして、大抵の場合、故人のこれまた著名な同業者、友人に委託されたもので、書き手がしばしば、「個人的知識」(“personal knowledge”)と「私的情報」(“private information”)をその大いなる拠り所としていることによる(これは、本文に付された出典の項にも併記されている)。したがって、『国民伝記辞典』は、主人公を親しく知る者のペンによる彼の肖像画、ないしは、主人公の外面的事実と内面的事実が渾然一体となったライフ・ストーリーという趣を有し、辞典というよりは、人生の思索へと読者を誘う読み物と呼ぶにふさわしい。この趣は、ジョンソンが単独で編纂した大部の『英語辞典』にも通ずるものである。

『国民伝記辞典』の発案者たるスティーヴン卿自身が、「わが読書の楽しみは、『ジョンソン伝』を読むことに始まり、『ジョンソン伝』を読むことに終わる」と述べているのも、頷けるところである。この2つの作物を相並べ、それらがそれぞれ18世紀と19世紀という劇的なまでに対照的な時代の作物であることを思い返すとき、時代や階級の違いを越えて、英国人が共有しているある一つの国民的好尚を、漱石同様、如実に見る思いがするのである。

ちなみに、この『国民伝記辞典』に収められた膨大な数の人物の中から、第2次大戦から1990年迄に死去した各界の名士150人を選んで編まれた『略伝集』[12]が刊行されたばかりだが、これは1冊の選集という形での初めての試みであり、手頃に、しかも、原文のままで楽しめるところがよい。

さて、いま筆者は、漱石言うところの一代の好尚から分岐した「肖像画」と「性格描写」を、今度は逆に元のひとつの根に戻したような作物を目の隅にとらえながら、ペンを動かしている——ロンドンの「国立肖像画美術館」が、つい数か月前に刊行した25枚の絵葉書中の1枚がそれである——

絵葉書表面の上半分には、フランソワ・ダルベール・ディラード(François D'Albert Dirade)の描いたジョージ・エリオット(George Eliot 1819-80)の肖像画(油絵/レプリカ/ディテイル　オリジナルは1849

年作）が、また、下半分には、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf 1882-1941）の手に成る伝記的メモが載っていて、そのメモの真上で陰影のある微笑をたたえてこちらを見ている女性がどんな人物であるかを説明している。

この絵葉書が、いま私の手元にあるのには、長い因縁話がある——

今から半世紀も前のこと、件の「国立肖像画美術館」があるプロジェクトを企てた。美術館の所蔵する夥しい肖像画の中から100点ほどを選んで、それに約70〜80語（これは英単語の数であり、日本字にして160〜180字といったところだろうか）の伝記的メモを付して、絵葉書に仕立てようというものであった。1920年代末から25年間に渡って間欠的に、時の著名な男女に伝記的メモの執筆が委託され、彼らはそれに応じた。ところが、この企画は、どういう事情からか（恐らく、25年という歳月を経る間に起きた、館長、編集長、秘書などの新旧交代が大きな原因だったと推測される）、結局、実らずおしまいとなり、一方、その間に寄せられた原稿はそっくりそのまま、偶然、1996年に発見されるまで、美術館内の公文書類保管庫の中で惰眠を貪っていたのであった。

当時の有名な作家たち、例えば、オルダス・ハックスリィ（Aldous Huxley 1894-1963）、T S エリオット（T S Eliot 1888-1965）、あるいは、多作を以て知られるG B ショウ（G B Shaw 1856-1950）の書き物ですら、新たに発見されたというビッグ・ニュースが途絶えて久しい今日、1920年代、1930年代に活躍したそうそうたる作家たちの物した100点もの「掌編伝記」（“mini biographies”）が、手付かずのまま保管庫で発見された時の関係者たちの興奮はいかばかりだったろうか。なにしろ、この美術館の保管庫には、肖像画以外にも１万点ものアイテムがあり、その膨大な堆積の中にたまたま２つの箱が見つかったことは、僥倖と言わねばなるまい。これらの箱には、例の原稿のみならず、同一執筆者による幾通りもの草稿、執筆者からの手紙、コメント、はては、電話のメッセージ（この時代にして！）まで収められていたと聞く。

さて、「選択」と「簡潔さ」を優れた伝記の絶対条件に掲げたL ストレイチィすらをも唖然とさせた約70〜80語という厳しい語数制限をめぐっては、憤激したり、途方に暮れた書き手もいたらしく、編集者に毒づい

た手紙や、逆に、削減の労を代行してくれた編集者の「熟達した圧縮技術」を手放しで賞賛する感謝状なども残されている。

例えば、G B ショウのキャプションは80語をはるかに越える長さだったので、編集者が縮小するよう求めざるをえなかった。これに対しショウは、「134語から成るわが力作を短くせよ、と言うのか」、と憤然として、次のように書き送っている ——「絵葉書を、それに添えられた文章（“letterpress”）のために買うなどという御仁は、一人もあるまいと小生は愚考致します。書記ふぜいにだって、『ブリタニカ』を基にまとめれば出来るようなそのような代物に小生が署名したくない気持ちくらい、あなたにもお分かりになるでしょう。但し、小生の書き物が最終的にどうなろうとも、匿名で、と言う事ならば、どのように取り扱って下さっても構いません」。

ショウのほかにも、興味深い逸話をいくつかご紹介したいところだが、紙数の都合もあるので、彼ひとりにとどめ、次に、私の守備範囲とも言えるヴァージニア・ウルフ〔ウルフについては、拙論「Bloomsburyの知的貴族たち」（『跡見英文学　第4号』跡見女子大英文学会刊、1991）で詳述しておいたので、そちらをご参照頂きたい〕の手に成るキャプションの全文を掲げておく（ショウの手紙と考え合わせると、伝記についてのふたりの考え方、スタイルの違いがおのずから想像されようからである）——

> 地方出身者だが、飽くことを知らぬ知的関心の持ち主。ジョージ・エリオットの初期の小説（“novels”）は幸福な思い出の成果にして、後期の小説は憂鬱な思いのそれである。曖昧な結婚による孤立化と法外に注がれた賞賛のために、若くして活力を失い、その小説は損なわれた。だが、小説の可能性（“capacity of fiction”）をさらに広げて、物語（“story”）を語り、風儀（“manner”）を映し出すにとどまらず、人生に思いを凝らす博大な精神が抱く見解や批判をも盛り込むべく、フィクションに求めたのであった。

上述したショウとは違って、ウルフのキャプションは、制限枠の最小値70語きっかりで書かれている。あと10語の余裕を残しながら、なぜ、

生年、没年、代表作の題名なりを盛り込もうとはしなかったのであろうか。ショウのキャプションでは、主人公ヘンリー・アーヴィングは、その134語の中で生まれ、業績をあげ、男爵の位を授与し、埋葬され、その生涯を閉じていて、概ね、年代記のスタイルに則している。長年、ウルフとその仲間たちに心寄せてきた私には、いみじくも、この極めて短いウルフの文章の中にも、伝記と文筆というものに対する彼女の美学と気構えが彷彿とされて、じつに興味深いのだが、彼女の伝記観は本論文(シリーズものとして構想されている）の主要な柱の１つであるので、ここではこれ以上触れないでおく。ただ、「国立肖像画美術館」の現館長・チャールズ・ソウマレッツ・スミス氏（Chales Saumarez Smith）による、「これはショウのそれとは対照的で、ジョージ・エリオットの業績の著しい特色を簡潔に要約していて、ひとつの奇跡である」[13]、という賛辞と、次の「インデペンデント」紙の記事中の無名氏によるコメントは、私も概ね同意するところであり、彼の考える優れた伝記の条件づけを明確にしている点からも、ご紹介しておきたい――

> これは、「小説の技法」（“art of fiction”）の好例とは言えないだろうか？　自分の思うところを、70語という許容範囲の語数に圧縮するために、何通りかの草稿を必要とした寄稿家も中にはいたし、苦悶を訴える手紙が何通か、送られてきた事もあった。どうやら、ヴァージニア・ウルフは、規定の長さにするのに、いっさい苦労を覚えなかったらしい。これは、「簡潔な批評」（“pithy criticism”）、「伝記に不可欠な情報」（“essential biographical information”）、そして、「小説の特質についての見解」（“thoughts on the nature of fiction”）を、いかにしてかくも短い文章中に盛り込み、纏まったものにできるかを示す見事な手本である。出だしの文法的誤りなど、気に掛けた者は誰も居なかった、と思われる。[14]

余談ながら、上記のコメントの最後の一文で言及されているウルフの犯した文法的誤りとはどのようなものであったのか、好奇心に駆られるかたもあると思うので、問題の冒頭の一文だけを記しておく――

> Sprung from country people but insatiably intellectual,

George Eliot's early novels are the fruit of happy memories; her later of melancholic thought.

今日の我々にとって、予期せぬ掘り出し物と言うべき「掌編伝記」(“lives in miniature”)ではあるが、そもそも、この企画がもたれた1920年代末当時に溯って考えてみると、これはまことに時宜にかなった企画であったと言える——

1920年代の終り頃と言えば、第一次世界大戦の余波によって、それまで商業主義、出世主義、神秘主義などによって7つの海を支配してきた大英帝国が、いよいよ滅亡に瀕し、英国国民がそれまでのヴィクトリア朝的価値観に懐疑を抱き始め、それと平行して、支配階級、上流階級の背丈が急速に小さくになりつつあった時期と重なる。本国のみならず、広く海外の帝国にまで支配力を誇っていた大英帝国の政治、文化への、そしてまた、その社会の中での自分たちの位置づけに対する信頼感を今なお温存しているヴィクトリア朝的人間たちがいる一方で、全世界を巻き込んだ未曾有の大戦を経験し、大英帝国を支えてきた価値観や、宗教、あるいは、人間性そのものすらをもはや信頼できなくなった20世紀の「失われた世代」、自らの幻滅と不安を新たな出発点として自らの人生を必死に模索している人間たちがいた。

先の企画は、意識的であったにせよ、そうでなかったにせよ、いま述べた後者の世代による、前者の世代・同世代の価値観やステイタスに対する再評価、再調整を世に表明する機会を提供するものでもあったのだ。

1997年1月、これまでに述べてきた新発見の「珠玉の文学作品」(“literary gems”)の中から12点が精選され、「アート&ライフ」と題するシリーズものとして、「インデペンデント」紙の日曜版(“*INDEPENDENT ON SUNDAY*”)の紙面を飾ることになった。こうして、半世紀以上も前に当時のそうそうたる人物たちが書いた「ミニ伝記」の原稿が、ついに公開の運びとなったのであった。

このシリーズ物は、1997年1月12日、先述したウルフのキャプション付きG エリオットの記事を以て始まったが、これが冒頭を飾ったのにはいくつかの要因が考えられる。ひとつには、近年とみに、ウルフがその

中心的人物であったグループが「ブルームズベリィ・グループ産業」と言われるほどに、英国や米国でブームを引き起こしているという現状、ことに、「国立肖像画美術館」付設のショップの絵葉書部門でウルフの肖像画（正確には、ＪＣベレスフォード撮影の写真）の絵葉書が、他のそれを大きく引き離してベストセラーを誇ってきた（ちなみに、1994年までの４年間の売上は21000枚という事実がある）。一方、Ｇエリオットのファンはいつの時代にも少なからず居て、安定株であるという事実に加えて、先述したように、ウルフのキャプションが圧倒的に優れているという評価が大きくものを言ったのではないかと推測される。いうまでもなく、人物描写の難易度、描写に要する語数は、取り上げられる人物の生涯の長さ、パーソナリティの複雑さ、業績の量、彼の生きた時代相など、様々な要素に関わることなので、一概には言えぬが、それにしても、ウルフのキャプションでは、紹介される者と紹介者がともに一人の生きた人間、対等のパーソナリティとして対峙しているという感じが伝わってくる。

さらに、このシリーズは完結後も、読者の強い関心に意を得て、今度は「現代版」（新たに17名の現代作家がキャプション執筆を委託された）と題して、第２弾を世に問い、現在、前シリーズに劣らぬ好評を博している。「現代版」では、例えば、シーマス・ヒーニィ（Heamus Heaney 1939-）がＷＨオーデン（Ｗ Ｈ Auden 1907-73）のキャプションを、マイクル・ホルロイド（Michael Holroyd 1935-）がリトン・ストレイチィ（Lytton Strachey 1880-1932）のそれを担当している。

「インデペンデント」紙のこれら２つのシリーズものの記事に寄せられた読者の反響は非常に大きく、美術館は、1997年秋、それらの中から25点を選んで１パックとし、「絵葉書版伝記――アート＆ライフ　シリーズ――」（“Postcard Biographies――ART & LIFE Series――”）と題して刊行、美術館付設のショップで売り始めた。これは、先の漱石の言葉を借りるならば、まさに揆を一にした「肖像画」と「一種の性格描写」の合体物である。「伝記文学」が筆者の数年来の関心事である事を知る友人が、早速、英国から１パック送ってくれ、その中の一葉を目の隅にとらえながらペンを走らせていると言う次第である。

余談ながら、後日談をすれば、先述したＨアーヴィングについての

ショウのいかにも長すぎるキャプションは当時は美術館側から見限られたのだったが、このパックものでは彼の134語から成る原文がそのまま使われている。

加えて、つい最近、その名もずばり、『キャラクター・スケッチ』(*Character Sketches*) と題するシリーズものの小冊子が刊行された。これは、上述の「絵葉書版伝記」の伝記の部分をより長く詳しくしたものと言え、対象とされているのは文学、美術界の著名人たちである。例えば、筆者の関心分野である『ブルームズベリィ・グループ』というシリーズ[15]には、19名の仲間たちの人物像、業績、相互の交友関係が、現代英国の代表的な伝記作家・美術史家の筆によって活写されている。小冊子ながら、その中身の濃度は極めて高い。

この企画の趣旨もさることながら、私には、この企画が実現されるに至る長いプロセスにも、英国人の国民性を見る思いがする。25年間という歳月をかけて原稿を収集し、何らかの事情で不発に終わったその企画をそっくりそのまま、半世紀を経て完遂する。あるいは、『国民伝記辞典』にしても、スティーヴンが着手した1882年から今日に至るまで延々と増補し続けている。同様なことは、世界で最大の規模を誇る英語辞典、『オクスフォード英語辞典』(*Oxford English Dictionary*)についても言える。このような事は、日本人、とくに、昨今の短絡的、直線的思考回路を持ち、結果の如何をインスタントに求める日本人には耐えられそうもないし、アピールもしないだろう。英国通のフランス人で小説家・伝記作者のアンドレ・モロワ (André Maurois 1885-1967)) は、「英国人ほど、時間によって、色々なものに加えられる美しさに敏感な国民はいない」[16]、と記したが、一千年も昔に世界的名作と言ってよい超大河小説『源氏物語』を生み出した我が日本人も持ち合わせていたそうした哲学、美学はいつ頃、なにを契機に過去の遺物になってしまったのであろう。

また、その歴史の長さにおいても、語彙の豊かさにおいても、けして英語にひけをとらぬ我が日本語の辞典にして、『広辞苑』クラスの物しか無いというのも、不思議な話ではある。エリオットの言う「歴史的感覚」(“Historical Sense”) の欠如によるのであろうか。

ところで、先にも触れたが、今日、英国では、以前にもまして伝記文

学が大変なブームを呼んでいるのはなぜだろうか。

「インデペンデント」紙（1994年９月17日付）の「図書欄」（“Books“）に掲載された、Ｊ キング著『ヴァージニア・ウルフ伝』についての書評が、伝記の発行件数の凄まじさについて、辛辣かつユーモラスに描いている――「伝記産業の巨大なソーセージ製造機械が、またもや、やってくれた。重い物がドーンという音をたて、ねじ曲げ、すると、ある文学的人物についてのもうひとつ別の、まるまると太った未消化の解釈がドサリと落とされた、というわけだ」[17]。

この目を見張るような伝記ブームについては、いくつかの要因が考えられる――

1. 富と競争原理を掲げたサッチャー政権以後、着実に消費社会化が進んできて、ＥＵ統合も目前に控えた現在、英国の人々には、自己のアイデンティティが包囲攻撃されている、あるいは、それが稀薄になりつつあるという危機感があって、その代償行為として、確固たるアイデンティティを持つ実在人物を主人公にした「伝記」を読みたいと思っている。

2. 輸送機関の発達によって、世界中どこへでも簡単に行け、また、テレビやコンピューター等の著しい開発によって、自宅にいながらにして、世界の色々な国で現に起こっている出来事――大統領の選挙、広島の原爆のドキュメンタリー、地雷の爆発など――が見られるというような状況――つまり、経験が想像を越え、現実はどんな幻想よりも恐ろしいことが判明された今日的状況の中で、人々は、恐るべき現代や未来に起こり得るものよりも、恐れる必要のない安定した過去の出来事について読みたいと思っている。

3. 創造的才能を持ち合わせない若い男女でも、事実という素材に寄り掛かれるので、「伝記」なら簡単に書けると思い込み、また、著述はカッコイイと思っている。

4. 「フィクション」を読むのは娯楽にすぎないが、「伝記」を読んで

いる間は、自分が「事実」についての知識を得ている、「歴史」を学んでいるという気分に浸れる。

［以上、2～4までは、中野好夫氏（『伝記文学の面白さ』）の示唆によるものであることを、お断りしておく］

以上の要因ですべてが説明しつくされているかどうか――私は私なりに、「伝記文学」を手掛かりに、可能な限り色々な側面からこれを考察することによって、自分なりの答えを見いだしたいと思っている。そして、その答えが摑めたとき、英国と日本という彼我の国民性の特質と、それによって築かれてきた両国の文化の特質、そして、逼迫している二十世紀的諸問題の解決法が少しは見えてくると思う。さらには、それを指針として日本の真に上質な文化の方向付けが得られれば、と願わずにはいられない。約1世紀も前に、漱石が留学先のロンドンから正岡子規に宛てた書簡の中で吐露していた日本の憂慮すべき状況は、現在も本質的に変わっていないか、悪化しているとさえ思えてならないからである。少し、長くなるが、上述の漱石書簡のさわりのところをご紹介して筆を置くこととしたい――

この国の文学芸術がいかに盛大で、その盛大な文学芸術がいかに国民の品性に感化を及ぼしつつあるか、この国の物質的開化がどれくらい進歩してその進歩の裏面にはいかなる潮流が横たわりつつあるか、英国には武士という語はないが、紳士と［いう］言があって、その紳士はいかなる意味を持っているか、いかに一般の人間が鷹揚で勤勉であるか、いろいろ目につくと同時にいろいろ癪に障る事が持ち上がって来る。時には英吉利がいやになって早く日本へ帰りたくなる。するとまた日本の社会のありさまが目に浮かんでたのもしくない情けないような心持になる。日本の紳士が徳育、体育、美育の点において非常に欠乏しているということが気にかかる。その紳士がいかに平気な顔をして得意であるか、彼らがいかに浮華であるか、彼らがいかに空虚であるか、彼らがいかに現在の日本に満足して己らが一般の国民を堕落の淵に誘いつつあるかを知らざるほど近視眼的であるかなどといういろいろな不平が持ち上がってくる。(18)

*　　*　　*

〈 おわりに 〉

本論文は、かなり長いシリーズものとして着想を得たもので、本稿は、言わば、その全体像の青写真ともいうべきものである。今後、予定しているテーマは以下のとおりである——

伝記の定義　伝記の歴史(英国、日本)　伝記の諸問題　伝記と歴史とフィクション　伝記学の歴史　文学的伝記（"literary biography"）　J ボズウェル著『サミュエル・ジョンソン伝』　H ニコルソンの伝記作品と伝記的エッセイ　L ストレイチィの主要な伝記作品と伝記理論　V ウルフの伝記作品と伝記的エッセイ　L スティーヴンの『国民伝記辞典』　伝記と「新批評」およびポスト・モダニズム　伝記と自伝　伝記とモデルとプライバシー　伝記と精神分析学　伝記と老い　副次的人物の伝記（"secondary biography"）　現代作家による伝記作品　伝記ブームと二十世紀的状況

注

(1) Lytton Strachey, "preface" in *Eminent Victorians* (London : Penguin Books, 1988) P. 10
(2) 中野好夫『伝記文学の面白さ』(岩波書店、1995)、PP. 4-6.
(3) Harold Nicolson, "The Practice of Biography" in *The English Sense of Humour* (London : Constable and Company Ltd, 1956), PP. 148-49.
(4) 『伝記文学の面白さ』P. 6, PP. 10-11.
(5) 佐伯彰一『伝記と分析の間』(南北社、昭和42年) P. 13.
(6) John Bachelor (ed.), *The Art of Biography* (Clarendon Press Oxford, 1995) P. 4.
(7) Ibid., PP. 57-8, PP. 63-5, PP. 68-9.
(8) Ibid., PP. 63-4.
(9) Ibid., P. 63.
(10) 『伝記と分析の間』P. 24.
(11) 夏目漱石『文学評論』(講談社学術文庫、新装版、1994)、P. 112, P. 114.
(12) Colin Matthew (selected), *Brief Lives——Twentieth-century Pen*

Potraits from the Dictionary of National Biography—— (Oxford University Press, 1997)
(13) THE CHARLESTON MAGAZINE, Issue 12, 1995
(14) INDEPENDENT ON SUNDAY (12 JANUARY 1997) P. 112, P. 114
(15) Frances Spalding, *The Bloomsbury Group* (National Portrait Gallery Publications, 1997)
(16) アンドレ・モロワ（安藤次男訳）『ディズレーリの生涯』（平凡社、教養全集27　『エリザベスとエセックス／ディズレーリの生涯／ジョゼフ・フーシェ』）所収、1962)、P. 309.
(17) *THE INDEPENDENT* (17 SEPTEMBER 1994)
(18) 夏目漱石「倫敦消息」（ちくま文庫、『夏目漱石全集　第10巻』所収、1988) PP. 648-49.

【なお、本文中の英文からの引用はすべて、筆者の日本語訳で統一しました。】